

第二節 山仕事と川漁

矢吹町では、山仕事や川漁を生業としていた人はほとんどいない。山林は総面積の二〇%台であるが深い山がなく、阿武隈川を除いては漁に恵まれる河川がないことから（はじめの章矢吹の風土と歴史参照）生業としての収入源になり得なかったことによると思われる。

山林を対象とする山仕事は、農閑期の仕事として立木の手入れが中心であった。また植林して美林にすることは山持ちとして誇りで篤農家とくのうかの証あかしでもあった。山を荒らしておくのは先祖からの財産を守れない家（人）として恥とされた。これは緑を守るためには理にかなった伝統でもあった。

山を売る（立木を売ること）のは家の立替えとか分家の新築など特別の事情がないかぎりあまりおこなわないのが普通であった。また山村地域と異なり一戸あたりの所有面積も多くはないのが実態である。

地所としての山地については、「山は先祖様のもの」「山を守るのは子孫の役目」「山持ちはシンシヨガイイ（金持ち）」「山を売るほど貧乏してない」「金が残ったので山を買う」などの考えが根強くある。

しかし最近の農業経営の中で山林に対する投資効果は期待できないので、だんだんその手入れも軽視される傾向にある。

一 山仕事

矢吹では、田・畑に仕事に行くのも「山仕事」「山に行く」といい、かならずしも山林の仕事だけをさすものではない。農作業の日常として、堆肥たいひのための落葉らくえつさらい、家畜の飼料として山草刈り、燃料としての薪・柴木とりも山仕事であるが、これは

雑木林を主とした仕事である。「村の歳時記」(昭和六十年刊)で野中三平こと鈴木三巳は神田の山仕事の一つ「山口」を次のように書いている。次に原文のまま転載する。

山口

②地方語で云われていたこと、そのま、伝えるので正確な言葉は未調査のま、である。

秋の稲刈りが終り刈り上げ十日の餅つきが終つて田の神様に供える季節には、嫁入りした人達は十日餅といつて、新米の餅を持って里帰りをしたものであつた。丁度この季節になると野分きの風が吹き荒れて那須の頂は真白な雪が積り、麓の稜線まで雪が見えて来て肌寒さを覚えて来て焚火が恋しくなつて来る。この季節になると、部落では山口という行事が行われた。村には私有林はあるもの極、限られた家のみにしかなく大半は、御料地といった宮内省直轄の松林と雑木林が殆んどであつた。この季節になると枯枝がどの松の木にもあつて松の生育を阻害したのである。貧しく燃料に乏しい部落では、この枯枝を部落中総出で刈落す作業を行ったものだ。それを山口と云つていたと記憶している。当日は朝早く青年の太鼓を合図に枯枝を打ち落す用意をして思い思いの場所に出たものだ。分担区という林野局の出張所があつて、村の代表が歎願の上、枯枝のみを落し、当日の日暮れまで取運んで根せきをとどめないという条件で黙認して貰つたように聞いていた。その出役は一戸当り二人と限られ、取り勝ち競争みたくない結果があつたようである。用具は十米もある竹竿の先に切れ味のよい鎌を結んで、枯枝の幹に数ヶ所の切り跡をつけ、鎌を枝先に向け力まかせに落す作業である。屈強な男手の揃つた家では相当量の枯枝を打ち落し、一人はたばねる作業であつた。私の家では父の仕事の関係で出られず、女一人で長い竿に鎌をつけた母が枯枝落しをした記憶は私には痛々しく残る。そしてやせ馬で背負つては長い冬の燃料としたものである。長い冬母の一人働きでは不足する燃料を、私等が出来る「根っことり」といって雑木林に入って古株の木の根を懸命に掘つたものだ。この山口が終ると、次は、「木の葉山口」といって新陳代謝で落ちた松の葉を集める山口があつた。これはたきぎ取りとは違つて、こぼれ落ちた、松の葉や雑木の葉を集めることで、人数は二人と制限され、短い冬の日懸命に落葉さらいをしたものである。雑木の葉は別として松の葉は大切な燃料の役目を果たしたものだ。これを運ぶのに「たばつら」といって藁の穂を合わせてたばねて、三段四段と数えて自家用にしたものであつた。秋も深まつて来るとい

つても、母が屈強な男たちに交じって甲斐がいしく私達を育てて呉れるために働いた姿を思い起し、御料地と呼ばれ、朝に夕に聞いたきじの鳴声も聞かれず土地改良の先駆者となった矢吹ヶ原の今昔を思い、貧しく生きた、生き方に改めて敬意を払いたいと思う。

ここでは、山林特に造林山地の仕事についてふれることにする。山林の仕事には、植林・刈り払い・間伐・伐採などがある。そのあらましをみることにする。

植 林

太平洋戦争中人手不足で手入れがいきとどかず、加えて乱伐したため山林が荒れ、戦後復興が軌道にのると家屋の建築で木材の需要が増し、さらに伐採がすすんだ。昭和三十年代にはいると植林が盛んになり、マツ・スギ・ヒノキなどを中心に伐採跡だけでなく、雑木林にも植林がすすんだ。スギは成長が早いので建築材・電柱材として需要が多かった。昭和五十年ごろまで特に多かった。四十年代にはヒノキが加わりマツなども植林されたが、現在ではあまりみられない。

苗木は森林組合などをおして、四年から五年生のものを購入し、場所によって適した種類を選び、一坪（三・三平方メートル）に一本の割合で、手で穴を掘り手植える。スギやヒノキは窪地（くぼち）の腐葉土の堆積した所で、マツは赤土の粘土質の土地がよく、スギは日陰や北向きが育ちは悪いが年輪が密になり良材を得ることができる。ヒノキは枝打ちの日数を多くしないと節（ふし）が残るので手間がかかる。植えつけた苗木は一割ほどは活着しないことを見込み、間伐をして三〇〇坪（一〇〇〇平方メートル）に二〇〇本程度にし、さらに良材にするため七、八〇本にするという。用材になるまでスギは四〇年から五〇年、ヒノキは七〇年くらいかかる。

刈り払い

下刈りともいうが植林してから五年から一〇年間は刈り払いをしないと苗木は成長しない。毎年夏に一回以上必ずおこなって雑木・雑草を刈り取る。



【写真59】山林の刈り払い（提供 後藤助一郎）

鎌を使い手で刈り払う作業は夏の仕事なので重労働だったという。現在は刈り払い機があるので楽になった。これは農家の一年の仕事計画に組みこまれるのが普通であった。

枝 打 ち

真つ直ぐに育て、無節にするために枝打ちをする。ヒノキは特に枝打ちをしないといふと良材を得ることができない。ヒノキは約二〇年で両手指の輪くらいになるのでこのころ枝打ちをする。スギは四年に一回枝打ちをし、通し柱の用材や電柱用に八メートルくらいまで枝をとる。松は五〇年くらいすぎてから枝打ちをするという。

枝打ち作業は樹皮がむけないように冬期間におこなうことが多く、梯子はしこをかけたなり、木登りして縄で足場をつくりおこなうが、これは山仕事のなれている人に頼む場合が多い。高木の枝打ちは木挽きびきの仕事にもなっていた。

間 伐

間伐は、木の生育と木の質をみて良材を得るためにおこなう仕事で、どの木を除くか見定めることが難しく植林数の三分の二くらい間伐することがよいとされるが、実際には思うようにできないことが多いという。苗木を植えて二五年くらいの期間に間伐は終え、るとよいとされている。

山 廻 り

山林の見廻りで、昔は隠居した老人の役割であることが多い。く、鉦かねと鎌を持参して山にいく。苗木の活着をたしかめたり、刈り払いの補完、枝打ちの補充、葛・藤の蔓切り、根ぐされ立木を見定めて間伐するなど、木の生育状態を観察して、次の手入れ計画をたてたり、小作業をおこなうのが山廻りで、良材を得るための美林の維持には欠



【写真61】 枝打ち



【写真60】 枝打ち

かせない仕事である。最近では山廻りをして手入れをしている人はみかけなくなった。

伐採

用材として適当になった立木を伐採するのは、木挽の仕事である。木挽は土地の傾斜や枝ぶりをみて倒す方向を決める。斧で枝を払い、倒す方向に鉞まさかりでV字型に削り目をつくり、反対側に鉞のほきで切れ目をいれ、くさび（楔）をいれて倒す。くさびは鉄製と木製があり、倒す方向によっていれる場所を選ぶ。くさびをいれることを「矢を打つ」ともいう。また立木の伸び具合や場所によっては長いロープで幹の中間を結わえ手伝いの人にひかせることもある。特に総伐採でなく立木を選んで伐採する場合はほかの立木に被害を与えないようにするため、技術と経験が必要である。

木出し

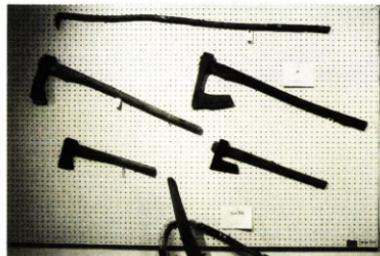
伐採した木を山から出すことを木出しという。木出しには、「ソリ」をつくり、丸太や雑木を通路に枕木状に並べ、その上をソリにのせた木を滑らせてひき運ぶ。これを「シラ」というが、修羅しよらからなまったと思われる。修羅は古代から人力で大石や大木を運搬する道具として使われているが「スラ」ともいう。ソリを滑りやすくするため油ツボにいった油をボロ布などでつけながら一〇人ぐらいで二石から三石の木材を道路のある所までひく。急斜面の運搬は危険をとまなう仕事である。現在は索道（ロープウエー）や作業道をつくり運搬用重機を使用することが多い。

ヤマシ

ヤマシ（山師）は立木の売買をする人で、製材所から派遣されたり、自分で買物をしてほかに売ることを職業としていた。ヤマシは現場で立木の持主と交渉して売買値段ゆだんをきめる。立木の種類・年数・生育状況・数量などから判断するわけだが、数量を計算することが一番むずかしい。立木は、「石」で数える。



【写真63】木挽道具（くさび）（提供 星正男）



【写真62】木挽道具（斧・鉞）

一石とは、根元から一〇尺（三・三メートル）のときの直径が一尺（三三センチ）のものをいうが、生育の違いもあり数量をみまらぐと損をすることもあり、一種の投機的な仕事でもある。売買を生業とし投機的性質の仕事をする人を山に関係がなくても山師というようになっている。

木挽

木挽は立木の伐採をする人で、要請があれば、高木の間伐や刈り払い、木出しなど人夫（テコ）を雇い指図して山仕事の全般を請け負うこともある。また、家の建替えの際、設計書を見て必要な用材を切り出すことを頼まれることもあった。その場合は、切った後に用途にあわせて板や柱に製材して木出しするなどした。斧、鉋、鋸を使いわけ、手作業の仕事は熟練と経験が大切でさらには大工の心得も求められた。

今回の調査で、矢吹町では矢吹・一本木・大和久・田内・柿之内・明新・中畑・三城目などに木挽といわれる人が居たことがわかったが、ほとんどは昔のことで、本業は農業で頼まれれば仕事をする人々で専業木挽はなかった。現在、その技術を受け継いでいる人は一、二人である。

次に、数少ない木挽の一人である星正男氏の聞き書きを添える。

星 正男さん（昭和五年生れ）

木切りは専業ではなく、農業のかたわら副業に木切りの仕事を請け負ってきた。現在は息子が植木屋をはじめたので造園業をしながら木切りは手伝い程度の仕事をしている。父は当家に養子にはいった人で早く亡くなった。自分では木切りをやるつもりはなく親方もいないが、祖父の星かん吉から教わったことは多い。祖父は昭和二十年代後半に死去している。かん吉はヒラバの方も含めて五里四方に知らない人はいないくらいの木切りの名人であった。薪を切る場合、たて五尺、よこ五尺に薪を積んだ棚を「ごんごうだな」というが、この五合棚を一日に三棚半切ることができれば腕のたつ人とみなされているが、かん吉はこれを



【写真64】木挽道具（鋸）

七棚から八棚切る腕を持っていた。このあたりの製材所などはかん吉に世話になっているところが多く、「昔、かん吉さんにお世話になったから」というので祖父が亡くなった後一〇年もたつてから香典を持ってくる人もいたぐらいであった。祖父の木切りのころは薪切りの仕事も多かったようだし、普請木も切っていたという。またノコギリ研ぎの名人としても名をはせていた。雨が降って仕事ができない日には、かん吉さんのもとは鋸を砥いでもらいに必ず七、八人の人がきていた。そのたびに祖父は来客に酒を出して飯を食わせながら待たせていたもので、星家では三食とも必ずといつてよいほど、だれかが相伴に与あずかっていたという。かん吉は須賀川の中谷とうじろうという鍛冶屋とつきあいがあつた。

星正男は学校を終えた二〇歳くらいのときに、短い期間祖父と一緒に仕事をしたことがあり、そのときノコ（鋸）の砥ぎかたや、ヤ（楔）のいれ方などを教わつた。ノコの目立ては最も重要で、手ノコでもチェーンソーであつても剃刀かみそりのようしておくものだ。仕事ができない人は刃物づくりも下手だという。自分は負けるのが嫌いで、いつも努力がたんねえと思つている。

木切りの仕事は稲刈りを終えて、稲をはせにかける秋からはじめて冬中仕事に歩き、春は田の代掻きをする時分まで続けた。正男さんの時代は薪ではなく、炭屋に頼まれて炭にする木を切る仕事が多く、矢吹の吉田炭屋さんなどからよく頼まれた。従つてほかの人と組んでおこなうわけではなく、一人で仕事をすることが多い。道路を拡張するようなときに、工事の邪魔になる木を切らないと仕事が進まないようなことがあり、こうした面倒な仕事は自分なりに社会奉仕だと考えて必ず依頼を受けたし、イグネ切りなど危険な仕事もよくひき受けてきたが、危険な仕事をしながらも一度も間違いをおかしたことがないのが、星さんのひそかな自慢である。

仕事には「常用」と「請負」とがある。「常用」は一日いくらというように、仕事量にかかわらず金額が定まっている仕事で、イグネ切りのように危険な作業は「常用」でひき受ける。「常用」の仕事量は最低限の技術しかない人であつても可能な仕事量を基準にしており、仕事ができる人にとっては損するように思えるが、それだけの仕事をこなせば大きな信用を得ることができ。一方の「請負」は一棚いくら、きのこ木一本いくらというように仕事の単価が決まっているので、量を多くこなすほどはい

る賃金は多くなる。普請木を切るような場合も普通は「常用」で契約する。家一軒建てるには一般に五日間かかるが、星さんは仕事が多いので「常用」で三人分切ってしまったこともある。「常用」ではよけいに仕事をしてもらうけにはならないので、こういう仕事をする二人分ただで働いた勘定になる。木切りの仕事は朝八時から夕方五時までおこなうのが一般的であった。

星さんは、刃物は必ず一回きり砥いで油を注し、安全剃刀のようにしておくことを信条にしており、仕事ができるできないは刃物の手入れで決まると考えている。

立ち木を倒す場合は間違いない倒すことが絶対条件で、たとえば一尺の太さの木であっても、いかなる向きであっても倒す空間が一尺ちよつとあれば一^{セツ}の隙間を保ちながら倒すことが可能であるという。木を切るときには、まず受け口を切っておき、その反対側からヤ（楔）を打ちながらノコで切っていく。ヤは真ん中に大きなものを、その両側に小さなものを打って、真ん中のヤで微調整しながら倒す方向を定める。このとき切り口を切り離さずに、わずかに切り残しておくのが重要で、倒す方向が定まったならばヨキでそこを止めると、大木であっても寸部の狂いもなく思う方向に倒すことができる。ヤは二種類あり、大きなものは長さが三〇^{セツ}、小さなものは二〇^{セツ}ほどである。以前は鉄ヤであったが、あたるとチェーンソーをいためてしまうので強化プラスチック製のものを用いている。木の切り倒し方は五〇石の木でも、三石の木でも要領は同じである。

チェーンソーが登場する前は手ノコを用いて切ったが、おもに幅二〇^{セツ}長さが三尺くらいの大きさの一番ノコを使う。ヨキは木を割るヨキではなくケズリヨキで、これで受け口を切る。

倒した木は玉切りする。普請木は大工が建築する家の間取りに応じて、何寸の何丁というように書いた「木取り表」をよこすのでそれに応じて必要な量を玉切りする。普請木の玉切りは大工に依頼されるのではなく、建主の求めに応じて依頼を受ける。玉切りも職人によって仕事量に違いがあり、仕事量は石数で数えるもので、直径一尺で長さが一〇尺ある木を一石と数えるが、今まで一番仕事をしたときで一日三〇から二四〇石の木材の玉切りをしたことがある。木材は棚でも数える。これも一番多いときには高さ三尺で幅六尺のサブロクと称する棚を、手ノコで六棚分つくったことがある。

星家では朝顔を洗うと必ず仏壇に線香をあげることにしている。年に数度、点した線香が途中で消えたりすることがあるが、こういうときにはいくら天気がよくても木切りの仕事を休むようにしている。先祖様がいつも見守っていてくれていて、しゃべることができないかわりに線香で教えてくれると思っているからである。今まで一度も怪我をしたことがないのは、毎日線香をあげているおかげだと感謝している。

星家には痛み止めの呪いが伝わっている。これは祖母から母へ女系で伝えられたもので、正男さんの奥さんは早く亡くなったので、この伝承を受け継がなかったが、正男さんはこの呪いを母から伝授し息子さんにも伝えていく。患部に触れずに指を使っておこなう呪いで、外傷であっても身体の内部の手術の痛みでも薬を飲まずに治る。今まで数多くの人がやってきて、この呪いを受けて治っているという。また直接星家にこなくとも、呪いを施した紙を使って患部をさすると痛みがとれる。この呪いは自分にもきくので本人も不思議に思っている。また、切り傷の特効薬という「かまきり油」も伝わっている。これはある年の正月に、一人の浮浪者がやってきた。星家のおじいさんが尾頭つきで酒をふるまったところ、浮浪者はお礼もできないからというので「かまきり油」を伝授して去っていった。これはゴマの油をいれた瓶に雌かまきりの腹を浸けたもので、秋にかまきりを捕えてつくる。ものすごく臭いものであるが、切り傷や刺し傷のときには、ガーゼにこの油をつけてしばっておけばよい。この油は患部を消毒する必要がなく、土がついたままでもつけて構わない。かまきり油があれば、カマキリの腹を割いて患部にきっちりしばりつけておいても構わない。手の指の股から手首にかけて長い茅を突き刺した人がこれをつけたところ、しばらくして刺さった茅がひとりで抜けて治癒してしまったという。

外国産材の大量輸入と合板・集成材の出現により、国内産材は安価となり林業も低滞し農家も山林に力を注がなくなると、山で働く人々も後継者のないまま姿を消そうとしている。



【写真65】刃の目立て（提供 星正男）

二 川や池の恵み

自然は豊かであり生活のカテはさまざまなところから手にいれることができる。町内を流れる河川や、数多くの溜池、また水田も生活のカテを得る重要な場であった。とても生業とはいえないが、子どもや若者たちは遊びや小遣いを稼ぐために水の恩恵を享受してきた。新鮮な海の魚が入手しにくい内陸の矢吹町では、身近な川や池、田んぼから得る魚介類が家の食卓をかざったのである。特に秋祭りに食べるコイや雑魚はこの時期の風物詩であった。同時に川や池の恵みを楽しむことは、生物の生態や性質を観察することでもあった。

(一) 魚とりの背景

漁の経験

たいがいの子どもたちは河川や池で魚とりをした経験を持つ。小学校時代に親や兄弟友人からその技術を覚え、一五歳くらいまでは友達とつれ立ってさまざまな魚とりを経験している。こうした「川遊び」は壮年時代も趣味として続け、暇な時間をみはからっては川や池に出かける人も少なくないし、楽しみとして釣りや漁を楽しんでいる老人も多い。矢吹町には専業の川漁師はおらず、とった魚介類は生活のカテにするためではなく、あくまで小遣いをかせいだり生活を豊かにする余業であり楽しみとしてのものであった。

川漁をする場所

矢吹町には阿武隈川という大きな河川があり、ほかにも泉川、隈戸川、阿由里川、神田と中野目境の小川、田内にはナメリ川、柿之内には広戸川なども流れている。川漁は家の近くをよく知っている河川に出かけるものであった。

川とまではよばれなくとも水田を流れる用水堀もだじな川漁の場であった。また忘れてはいけないのが水田である。かつて

の生活では水田は作物をつくるだけでなく漁撈の場でもあったのである。矢吹町内では昭和三十年まで水苗代と称する通し苗代が盛んに使われており、水苗代には年中水がはられていて苗代に使わないときでも時々うなつた。ここにはドジョウがたくさん生息しており格好の漁場であった。

池もまたしばしばいく場所、大池に出かけたという人が多いが、地元の坂口池や新池（中野目）、釜池（五本松）、入ノ沢池・子八清水池・長命池（田内）などにも出かけている。水源に乏しい矢吹町では小さな溜池がいたるところにあり丁寧に管理されていて、これを利用して魚を育てたりもしている。

魚 種

矢吹町内とれる魚は淡水魚に限定されているが種類も多くはない。コイ、フナ、ライギョ、ハヤ（アカハラ）、ヒガイ、セイ、ダギボウ、ウナギ、ナマズ、ヤツメウナギ、ドジョウ、カジカ、カンベなどの魚類のほか、エビ（ヌマエビ）、シジミくらいである。この中にはカジカやドジョウがどこにでもいた魚であった。しかし農業を使うようになり、河川も工場排水で汚染されるようになった昭和四十年代になると、どこにでもいた魚介類は激減し、水にはいって遊ぶこともできなくなって、子どもたちの生活は水辺から次第に遠のいていった。

魚 具

漁具といってもほとんどは手づくりのものであった。釣竿のほかにこのあたりでよく聞くのはガツキンボウとかジャキンボウと称する音の出る道具で魚を追うのに使う道具であった。ヒヤシバリ、ヒタシバリ、シタシバリなどという仕掛けも広く使用されている。ドウはハケゴともいい、ドジョウをとるのに使う。以前は篠竹でつくったが後に雑貨屋で買った。ドウに似たものに竹筒がある。ドジョウは最も多くだれでもとった魚でドジョウブチ（打ち）バリでとることも多い。網には三角網、投網などがあつたが、三角網はさまざまに使う。ほかにも突き漁に使うヤスがある。それとセットで使われ



【写真66】串（ユグシ）に刺してやくハヤ

るのはガラス箱であった。

(二) 魚をとる方法

魚などをとる方法は同じ呼称でも、人によって若干異なる点もあるので一人ひとりの話をそのまま記述する。

明新のFさん

道具としてはヒタシバリ(浸し鉤)、ドジョウドウ、三角網、ジャッキンボウ、ドジョウブチバリ(どじょう打ち鉤)、ハケゴをあげている。ヒタシバリというのはパン糸ともよばれる木綿糸に、一俵いちばらくらいの間隔に鯉針をつけ、針にミミズをさして川底に浸しておくものでナマズやウナギをとった。ドジョウドウは篠竹の皮をむき四合ビンくらいの大さの円筒形に編み、底部には内側に反るよう返しをつけた道具である。中にはタニシをつぶして米糠やニラをまぜた餌をいれておき、ドジョウがいるところに沈めておくとドジョウは餌につられてドウにはいる。

秋にはエビもよくとった。エビは篠笹を束にしたものを二か所くらいしばったササモダというものをつくり池に沈めるが、ひきあげやすいように三、四メートルくらいの縄をつけておく。エビをとるときには土手から静かに縄をひき、ササモダの下に網をいれながら池からあげてササモダをばさばさ振ると、隠れていたエビが落ちてくる。溜池にはカマチというところがあり、そこは草むらになっていてカッパッコという浮き草やジュンサイが浮いている。こうしたところには、エビをはじめコイやフナの子魚が餌を求めて寄ってくるのでササモダはここをねらってしずめるとよい。

三角網は矢吹町ではどこでも使っていた。細い若木を半円に曲げ、手元のところを竹にした枠に三角錐の形の麻糸の細かい網を装着したものである。現在はビニールパイプ製で四角な網を装着したものが売られている。この網はいろいろな使い方をすると、たとえば川の流れにこの網を仕掛け、網が倒れないように土手の土で押さえておく。そのうえで上流から左右に足を広げながら水をかき回してすすむと、泥と一緒に小魚やエビが下流に逃げて三角網に流れこむので、網をあげゴミをとり去って獲物だけを

とる。

ジャッキン棒は魚を追い出す道具である。四角い座金を五、六枚をつけた金具を直径三、四イセシナくらいの太さで背丈ほどのスギの棒にカブツとよぶ口金を使ってとりつけたものである。ジャカジャカと音がするのでジャッキン棒とよんだ。ジャッキン棒で音を出しながら川や堀の草むらをつつ突いて魚を追い出す漁に用いる。三角網を下流に仕掛けて上流からジャッキン棒で突いたり、冬は舟の上から氷の下にいる魚や岸辺の草むらをジャッキン棒で突いて魚をとった。舟の棹にもなるし深みで泳ぐときの支えにもなったので子どもたちは夏になるとジャッキン棒を使って毎日のように水遊びをした。

ヤスもよく使った。縦長の箱にガラスをはめて松脂やパテで密封したものをガラス箱という。これを片手に持ち、一方にはヤスを手にして深みでは上流に向かって足だけで泳ぎながらガラス箱で川の中をのぞいてヤスで魚を突く。ヤスで突くのは比較的大きな魚である。

水苗代は一年中水をはっておき苗を育てる苗代としてだけ使う田んぼである。水苗代にはドジョウが多く生息しているのでよくドジョウをとる。一〇イセシナくらいまでのプリキに、五イセシナほどの間隔で長さ五イセシナほどの刺し針をつけ、これを篠竹の先に松脂で固定させる。これをドジョウウチバリ（針）とよび、夜間水中で眠っているドジョウを刺してとる。とった小魚などは口が広く首の部分くびらせたハケゴと称している腰にさげた籠にいれる。

中野目の〇さん

テンカラ釣り、ヒヤシバリ（浸し鉤）、ドウを使った。テンカラ釣りは阿武隈川の瀬で暗くなるころにおこなう釣りで毛ばりをつけ、毛ばりを流しながら瀬をさかのぼっていく流しばりの一種でハヤ、ヒガイなどをとった。ヒヤシバリにはチョウビとイッポンビとがある。チョウビは長さが五メートルから六メートルのパン糸に、一メートルおきに七〇イセシナほどの糸を四本くらい結び、その先端に鉤をつける。鉤には太いミミズをつける。パン糸の一方を大きな石に結んでおいて、一方の端も石に結わえて川の流れに仕掛けておく。イッポン（一本）ビも同様に仕掛けておくものであるが、鉤は一本にして木に結んでおく。ヒヤシバ

リではセイ、ナマズ、ウナギ、コイ、ライギョなどをとった。

ドウはウツボともいう。ドウの中にニラ、米糠、ツブの中身をいれて田んぼの中の尻水口や用水路の口に夕方仕掛けてドジョウをとった。ドジョウは夕立などがあつて水が出ると流れをさかのぼるので、そういうときは水口の側を向けて仕掛ける。これをノボリドウといい、天気の良い日にはそれとは逆にクダリドウに仕掛ける。水苗代にもドジョウがいるのでドウを仕掛けたりもするが、水苗代に仕掛けると田の持主がドウごと鍬でうなったりすることもあつてドウがだいなしになるので、水苗代ではドウではなくドジョウブチをすることが多かった。ドジョウは夜に動かなくなる。そこで夜に松の根を割ったタイマツのカガリ火をたきながら、ドジョウブチバリでドジョウをとる。ドジョウブチではドジョウが五合から一升もとれた。

ガラス箱で川の中をみながらカジカ突きをした。カジカは泳ぐのが遅く石の下に隠れていて、そこから出ると近くの石までしか逃げないのでガラス箱でのぞきながら石をどかし、出てきたところをヤスで突く。ほかにもヤツメウナギ、カジカに似たダンギボウ、ヤツメウナギなどもヤスで突いた。

中畑のSさん

昼間はヤスでコイ、フナなど比較的大きな魚を突き刺す。これをヤス突きという。ヤスの針の長さは一〇センチくらいで、長い竹の柄をつけておく。夜間は水苗代にいきタイマツを焚きながらドジョウウチバリでドジョウをとった。ドジョウは夜になると動きが止まるのでそこを狙つてうつ。ドジョウウチバリは棒に七から八センチくらいの針が植えてあり店に売っていた。その棒を篠竹にとりつけ一メートルから一・五メートルくらいの長さにしたものを使う。Sさんも音を出すジャキン棒を使い魚を追い出した。

田内のKさん

池のエビもよくとった。池の中に縄でしばった葉のついたままのスキの枝を沈めておく。エビはそこに集まるのでエビが集まったところをみはからつてスキの枝をあげ、網ですくう。

三城目のOさん

シタシバリ（浸し鉤）をよくした。八〇センチくらい、五〇センチくらいの長さの木綿糸をとりつけ、糸の先端には大きな鉤をつけ餌をつけたものを川に投げこみ、竹は川べりに深く刺して流されないようにしておく。夕方仕掛けて朝にそれをあげる。ドジョウはドジョウドウでとる。ドジョウドウは雑貨屋で売っており長さが三〇センチくらい、直径は太い方で一〇センチ程度。タニシを潰して揉んだニラと混ぜたものを中にいれておき、返しのない方には糞を詰めておく。田んぼのしり水口に何本もかけておいて翌朝あげると一つのドウに一〇匹もはいる。何本もドウをかけると結構な量がとれた。

シジミは砂地のようなところに生息している。ジョレンのような道具で砂をすくってとったりもするが、子どもたちは川にはいって足で砂をかき回したりしながらとったものである。

根宿のGさん

ジャッキン棒で魚とりをした。ジャッキン棒はスギのナガ（棒）に座金のついた金具をとりつけた一・八メートルくらいの長さの棒で、堀に三角網を動かさないように固定し、土手の上からジャッキン棒で草むらを突きながら下流にくだってくる。逃げた魚が下流の網にかかる。雨が降って外仕事ができないようなときによくやったという。竹筒も使った。これは唐竹（真竹）を切り節を残して筒状にする。あいている方には釘などで返しのようなものをつけ、中に餌をいれてひもをつけ夕方沈めておく。餌にひき寄せられて竹筒の中にはいった魚が身動きできなくなっているのを朝ひきあげる。シジミも川の砂地にたくさんいたので、掘ってよく汁の具にした。ドジョウは売りにもきた。余分にとったドジョウはハケゴにに入れて小遣いかせぎに売りにきたものであった。

(三) 堀や池のセリ、カーガリ

堀のセリ 根宿では昭和四十五、六年（一九七〇、七一）に圃場整備されるまで、集落で春におこなう道普請の後の酒宴の席で、集落内の堀のセリをして

いた。根宿には堰堀、中田堀、畠ヶ堀、馬洗場堀などがあり、それらの堀の長さを区切って区長がセリをする。魚がいつぱいとれるような場所は値が高かった。田んぼで水が必要でなくなった秋に泉田川の堰を抜くことになるが、堰を抜いたときに春のセリで競り落とした人は各堀で捕った魚を自分のものにする権利があったので、何人かの手に手伝わらなくてその場所で魚をとった。時期は秋の祭りの前あたりになる。たくさんとれた場合には串に刺して焼き、ダテマキと称する薬を束ねたものに刺して保存しておいた。

池セリと池抜き

明新でも区で池の管理をしていた。大池、山迫田池、松葉池、三つ池（蟹沢池、亀池など）三つの池がつながっている（池の水を溜めるために池の栓をする）池抜き（池の水を抜く）の日にちなどを決める。池抜きをして泥流しをするのは毎年ではなく池に泥がたまったころをみはからっておこなう。区の総会の後で池セリをおこなうが、大きな池は一人では高いので五人とか一〇人のナカバで何年間かの契約で買う。落札した人はその池を管理しコイを放し池抜きをするまでの期間飼育する権利があるので、池が大きいと魚も多く飼えるし大きな儲けにもなる。小さな池の場合は複数ではなく一人で落札する。またヒ（樋）を抜いてまっすぐ集落に水が届くようなところにある池は安い価格で競る。こうした池は防火用水として使うのでいつヒを抜くかわからない。そのため池の世話をする人を決めるためにセリをするようなものだったので安い価格に落札し世話をお願いする。池抜きは秋の稲扱きとスルスヒキが終ったからの作業であった。タテヒについているドロハキのヒを抜いておこなうが、



【写真67】ダテマキに刺した魚

その日には世話人が天候の具合で判断する。決まると池抜きの触れをまわして泥流しをしてカーガリをする。カーガリは旧暦九月九日の秋祭りのころと決まっており、年によっては寒くなり火を焚いて暖をとりながらおこなうことも少なくなかった。池は水の利用だけではなくコイの養殖をする上でも重要な場所であると同時に、セリで得た財源は区の重要な収入源に組みこまれていた。

カーガリ この地方では堀や池を干してバケツで泥を浚い小魚を捕る行事をカーガリ（川狩り）と称している。これは溜池

作業である。

中野目は天水場が多かったのでそうした田んぼは溜池に用水を依存していた。中野目でも溜池は区で管理しており、池の管理に関しては区のおきてがあった。池のセン（栓）の開け閉めなどは区長の権限になっている。区で管理している池は三つあり、区ではこれらの池にコイの稚魚などを放して飼育していた。一つの池には稚魚、別な池には育った魚というように使っていたが、毎年カーガリをする。カーガリは十月二日の祭りの二、三日前になると区長が「カーガリやつお」と触れを廻す。カーガリには区の人たちがシヨイカゴや大笊、バケツなどを持って集まり水を抜いた池にはいつてドロモミをする。ドロモミとは池にたった泥をかきだしたりする作業で、そのとき大きく育ったコイもとる。ドロモミの後、コイのほかにも捕った魚は戸数割りにし平等に分配するが、それでも多い少ないがあるのでくじ引きをしてその順にわけたものである。コイは秋祭りにご馳走したものであった。

明新などでもカーガリでとった小魚は砂糖と醤油で煮て食べるが、とっておくとニコゴリになりことにおいしかった。特に秋祭りにはどの家でもカーガリでとった雑魚を煮たものを出すものだった。煮ものはあまり日持ちがしなかったので、後になって雑魚を煮たものを天ぶらにするのがはやった。